

## 卒業生講演会

## 先輩の選択を参考に

城北会誌部会



2024年12月13日、令和6年度の卒業生進路講演会が本校講堂で開かれました。本校進路部が1年生約320人を対象に、社会で幅広く活躍する卒業生の話聞いて、進路選択の参考にしてもらおうという狙い。3人の講師は城北会が推薦しました。生徒たちは興味深い講師の熱弁に耳を傾けました。

## 自分の人生の操縦席に座る

最初の講師は、吉富愛望アピガイルさん（平24）。早稲田大学先進理工学部物理学学科、東京大学大学院理学系研究科物理学専攻を経て、現在は一般社団法人細胞農業研究機構の代表理事を務めておられます。

大学院では原子核物理を専攻していましたが、新しい可能性を求めて進路を変更し、当時発展途上だったブロックチェーン業界へ進みました。日本が暗号資産に関するルールを世界に先駆けて作り、国際的な注目を浴びていた時期です。

しかし、この最初に所属した会社は7か月で解散。この予想外の経験は人生を深く考える機会にもなったとのこと。その後、自分のルーツであるイスラエルでのボランティア活動を通じて、「日本の国力増強に寄与したい」という思いを抱くようになったといいます。特に、この後に従事した伝統産業のIT導入や投資銀行での経験を通じ、「ルール形成」という概念に興味を持つようになりました。「ルールを作ることで、日本が新しい技術分野でリードできる」「他国の作ったルールに従うのではなく、自分たちでルールを作ることが重要」と強く実感したといいます。



現在は、資源効率や気候変動対応の観点から注目されている「細胞性食品」分野でルール作りに取り組んでおられます。この活動は、培養肉などの新しい技術において、日本国内での安全性や品質、表示基準が未整備な現状に対応するために、産業界や政府と連携し、ルールを整備することで、企業が投資しやすい環境を作り、技術革新につなげていくというものです。このために産官学連携の研究会を立ち上げ、2年前にこれを法人化しました。

吉富さんは、未知の分野に飛び込むたびに、新しい人々との出会いや視点の広がりを得ることができたといい、「若い時期だからこそ、大胆に挑戦し自分の未来を切り開くことができる」「興味を持ったことにはまず手を伸ばしてみる勇氣を持ってほしい」と呼びかけました。一方で、「挑戦には失敗がつきもの」とも述べ、「失敗は学びの機会」と捉えるよう促しました。また、「他人の作ったルールに従うのではなく、自分のルールを作る」「人生の操縦席に座る」意識が大切だと語り、この意識を持つことが未来を切り開く鍵になると力強いメッセージを送りました。

この講演は、これから将来の夢を描こうとしている高校生たちにとって、大きな励みとなる内容だったに違いありません。

## 知識は使うだけ増える

二番目は家田淳一さん（平7）。東京大学で物理を専攻し、大学院に進み、茨城県東海村にある日本原子力研究開発機構先端基礎研究センターで働いています。東京・目黒区などでの生い立ちや学生時代を語った後、今の研究内容に入りました。

まず、東海村が「干しいも」と、ノーベル物



物理学賞を受賞した小柴昌俊氏(2002年)、梶田隆章氏(2015年)の研究で知られる「ニュートリノ」の生産量が世界一、とユーモアを交えてスタート。現在はスピネエネルギー科学研究グループに所属し、ニュートリノの兄弟である電子を制御する研究に取り組んでいます。スマホやパソコンは電力消費に問題があり、「富岳」というスーパーコンピュータは、隣に同じぐらいの大きさの冷蔵庫が必要。コンピュータを動かすと同じぐらい冷やすのにエネルギーを使うのは無駄であるといいます。電子には電荷とスピンという二つの顔があり、電荷は熱の元だが向きがなく、スピンは向きがあるので、それをうまく使って、電荷の熱の発生を制御する研究が、半導体の技術とともに進展。特に現在国際的な研究開発が進んでいる磁気ランダムアクセスメモリ(MRAM)が進化すれば、1回充電すると1か月間充電しなくても済むようになるかもしれないと、最先端の物理学研究の話を知りやすく語ってくれました。

さらに読書体験も。小学校時代に見た映画「ネバーエンディングストーリー」の原作本に出てくる「汝の欲することをなせ」という言葉が自分の最初の指針となったそうです。しかし、それはやろうとするとなかなか大変で、どうやって実現するかを考えるのが人生である、また遠藤周作の『落第坊主の履歴書』は、何かいやなことが起きても、その中に何かプラスのことが潜んでいる、などと本から学んだことを披露しました。

最後に後輩たちにエール。科学とは矛盾したパーツが合わさったモザイクのようなもの。それが重なってどうしても合わないところから発展していくので、いくらでもやりようがある。たとえばガラスは固体のようですが実は液体、でもその理由は解明されていない。「資源には限りがある、日本は資源が少ないと思っているでしょうが、唯一知識だけは使うと増える」と、知識の探求を続けることの重要性を訴えて締めくくりました。

#### 劇場は大勢が共感を覚える場

最後に登場した長塚圭史さん(平6)は劇作家、演出家、俳優で、現在横浜にある神奈川芸術劇場の芸術監督を務めています。父親の長塚京三さんも著名な俳優。仕事内容を含めた自己紹介の後、「ここ(母校での講演会)は僕にふさわし

くないかも。大変な落ちこぼれでしたから」と照れ臭そうでした。

子供時代を振り返りました。小学生の時、帰宅すると一人で人形遊びを夢中で何時間も。中学生になっても同じ。戸山高校に補欠で合格し、演劇部に。大学生となった卒業生と共に、学外の演劇活動に熱中。「卒業したら演劇の世界に飛び込もう」と思ったそうです。夜間の早稲田大学第二文学部に合格し、ある先生だけが「お前が行くところだ。社会人と一緒に学んで、絶対面白いよ」と後押ししてくれました。

劇場運営の考え方を説明。神奈川芸術劇場は、劇場自体がプログラムを作り、上演する創造型の公立劇場。税金、入場料・貸し会場収入で運営しています。「推し」の俳優が出演すると、観客が詰めかける。しかし、その公演が終わると、クモの子を散らすようにいなくなってしまうという課題も抱えています。一方で地域の劇場なので、地域の人たちに利用してもらうことも大事。「子供向けの劇、今の社会を批評する作品があってもいい。そんな思いを持った劇場を作りたい」と訴えました。

劇場の魅力も語ります。劇場では、観客の力が大きい。舞台はリアルな空間とは違う。俳優が「僕はロバート。ロンドンに住んでいます」と言ったら、観客はそう信じてくれる。観客の想像力がその空間を生み出している。公演が終わると観客が拍手するが、長塚さんは「お客さんに拍手する」。劇場は大勢が共感を覚える場である、といい、「演劇には啓もうする力があり、教育にも演劇が入ったらいいなと思う」と語る。多様な社会を受け入れる視点が持てる可能性を指摘しました。

長い間、演劇に取り組んできた長塚さん。劇場に縁の薄い高校1年生に「劇場は皆さんのもの。演劇に関心がない人も利用してほしい。神奈川芸術劇場は高校生以下の入場料が1,000円。食堂に行くような気持ちでのぞいてみて」と呼びかけました。

最後に、自分の半生を振り返りながら、「どちらの道を選ぼうか迷う時、僕はいつも難しくくて簡単にいかない道を選ぶ。混乱もあるが、思いがけない出会いがあるかもしれない」とアドバイスしました。

